

公園の角を曲がると

ヨコテ

このところ娘の江里香の様子がおかしい。情緒不安定で嘘を吐くことが多く、自分で作った話をさも実際にあったかのように話す。麻里子は、娘が嘘を吐く度に心苦しさを覚えた。そうってしまった責任の全てが自分にあるように思えてならなかった。

早紀ちゃんのお母さんは本当のお母さんじゃないんだ、と悲しい顔をして言う。おうちでは苛められているから親切にしてあげるんだ、と真顔で呟く。テレビドラマの不幸な少女を早紀ちゃんに重ねているのだろう。早紀ちゃんは江里香と同じクラスで、近所に住んでいる幼馴染みの仲良しさんだ。お母さんとも昔から懇意にしている、早紀ちゃんは実子に間違いなかった。江里香を身ごもった頃、彼女のお腹も大きかったのを昨日のように覚えている。苛めているというのも考えにくかった。ふたりと一緒にスーパーへ買い物に行く姿を何度も見ており、早紀ちゃんからはいつも屈託のない笑みが零れていた。

担任の谷本先生がお金持ちの社長さんと不倫しているとも言った。これもテレビドラマの影響なのだろう。内緒だよ、と江里香は人差し指で自分の口を塞いだ。何処まで不倫という言葉の意味を理解しているのか分からなかったが、九歳ともなればそういった大人の複雑な事情を臆気ながらも理解しているのかもしれない。谷本先生は若くて美人だが、堅物な教育者とのイメージがあり、不倫とは結びつかなかった。社長らしき人物と谷本先生が仲良く談笑しているところをたまたま目撃し、短絡的にそう思っただけだろう。

娘の江里香の情緒不安定、作り話——その原因が何処にあるのか、麻里子には分かっていた。明るくて素直だった江里香の態度に変化が現れ始めたのは二ヶ月ほど前からだった。業務用事務機器のメーカーに勤めている夫の貴志が単身赴任で大阪へ行ってから、江里香はおかしなことを口にするようになった。

麻里子は一家で赴任先の大阪へ引っ越すのが最善の方策だと思ったが、貴志の赴任予定は二年間で、貴志は、そのために江里香を転校させたり、麻里子にも余計な気苦労を掛けさせたくないと言った。だから単身赴任で大阪に行くとしたのだが、江里香は泣いて、大阪へついていくと駄々をこねた。どうしてパパと一緒に暮らせないの？ と、毎日のように訊いた。それが叶わないことだと分かり、おかしな言動が始まった。そのたびに麻里子は注意をしたが、強くは言えなかった。江里香の心情が手に取るように分かる。自分自身が夫と離れて暮らしていると、想像していた以上に、夫のいない生活は索漠としていた。東京の郊外からの、家族揃っての転勤にもう少し拘っていればよかったと今では後悔している。

麻里子は担任の谷本先生に相談することにした。自分ひとりで問題を抱えていても問題が解決しないのは明らかだったし、江里香の学校での様子も知りたかった。学校でも家と同じように嘘を吐いているかどうか気がかりだった。また、同じような事例が過去にあったかもしれない、とも思った。父親が単身赴任になったために、家族がバラバラで暮らしているケースはよくあることだ、江里香のように様相が急変した生徒がいたかもしれない。そして、谷本先生が江里香をどのようにみているのかも知っておきたかった。江里香が先生を貶めるような、不倫という言葉を使ったのが懸念された。何かふたりの間に確執があるのかもしれない。

電話でアポを取ると、しばらく考えてから先生は返事をした。では、二日後の放課後——その日は麻里子にとっても都合がよかった。江里香がピアノ教室に通っている日で、帰りがいつもより遅い。

授業参観日以来に校門をくぐり、職員室の横の応接室に入る。

ソファに腰を下ろすと、谷本先生がすぐにお茶を持ってきた。谷本先生は質素なグレーのカーディガンを羽織っていた。が、地味な服装でも押さえきれないくらいに輝いて見える。大学を出たばかりらしいから、おそらく二十三、四だろう。十歳以上も年下の谷本先生に、麻里子は軽い嫉妬を覚えた。

「お忙しいのにお時間を作ってくださいますありがとうございます」

麻里子は恐縮して言った。学校の先生は、授業の準備やテストの採点、課外授業の引率などでほとんどプライベートの時間がないと聞く。勝手な理屈で苦情を言うモンスターペアレントも今や社会問題化している。苦情ではないが、麻里子もまた先生の手を煩わせるひとりに違いなかった。

「いえいえ。私も内山さんのことは心配していましたから、電話を差し上げなくては、と思っていたところでした」と、微笑みをちょっとだけしかめ、谷本先生が言う。

江里香のことを先生が気に掛けてくれていて、麻里子は安堵した、同時に、学校でも問題を起こしているようで不安になる。

「それはどんなことでしょうか……」

「内山さんが最近、頻繁に嘘を吐くことがあると電話で仰ってましたが、学校でも似たようなことがあったんです……」

谷本先生が膝の上で持っていたハンカチを強く握りしめた。

「似たようなこと？ 江里香は学校でも嘘を吐いているんですか？」

「嘘といいますか……ええ。そうですね。現実離れした話をすることがあります」

「それはどういった話ですか？」

「空飛ぶ人間を見たとか、喋る犬がいたとか……」

「そんな嘘を……」

たわいもない嘘だが、今の麻里子にとっては看過できない重大なことだった。

「一度は、学校に吸血鬼が出たとも言っていました。あっという間に校内に広がり、泣き出してしまう下級生もいたほどです。おそらく他にもまだあると思います。ですが、教師の耳まではなかなか届かなくて……」

「申し訳ありません。ご迷惑をおかけしまして」

江里香の吐く嘘が学校中に影響を与えていたことに驚き、麻里子は身を縮めるしかなかった。

「そんな、謝るのは私の方です。担任なのに気づかないことばかりで、内山さんの力になってあげられているのかどうか……話し合いを持ったことがあるんです、一週間前に」

「話し合いを……知りませんでした。江里香は何も言ってくれなくて」

「お母さんには言いにくかったのでしょうか。心配を掛けたくなかったのかもしれません。どうして嘘を吐くの？ と訊いたんですが、本当のことだもん、と言うばかりで。おそらく寂しさを紛らわそうと嘘を吐いているんだと思うんです」

「それは父親の単身赴任のことですね？」

「ええ、おそらく。お父さんのいない寂しさが内山さんに重くのしかかって、内山さんの心は耐えられなかったのでしょうか。おうちでも内山さんは嘘を吐いたりしているそうですが、それはどんなことですか？」

唐突に訊かれ、麻里子はぎくりとした。不倫の話を生徒の誰かに聞いたのではないかと思った。

「早紀ちゃんのことで……」と、話を始める。早紀ちゃんの話なら無難だろう。いくら何でも不倫の話は出来なかった。

「早紀ちゃん？」

「ええ、早紀ちゃんのお母さんは本当のお母さんじゃないなんて言うんです」

「そんなことを……」と、谷本先生が眉根を寄せる。

「もちろん違います。でも、どうしてそんな嘘を吐くのか……」

谷本先生の口元に、ほんの少しだけ力が加わった。

「優位に立ちたいと思ったのかもしれませんがね」

「どういうことですか？」

「自分よりも恵まれた環境にいる早紀ちゃんへの反発とでも言うんでしょうか、ちょっと嫌な言い方ですが、早紀ちゃんを貶めて、それを上から眺めて満足するというような……」

確かに嫌な言い方だった。だが、正鵠を射ているとも思った。

「私にも反発しているのかもしれませんが」と、谷本先生が悲しそうな笑みを見せた。

「先生にも？」

「反発といいますか……あまり好かれてはいないようです。分け隔てなく接してきたつもりなんです……至らない点が多々あったのでしょう」

江里香はちょっとおませだ。江里香も自分と同じように、谷本先生の美しさに嫉妬しているのだろう。それが不倫という、貶める言葉になって現れたのかもしれない。

「それは気になさるほどのことでもないと思いますよ」

麻里子はニッコリと微笑んで言った。

「そうだといいんですが……。それでお父さんの大阪赴任はあとどのくらいなんですか？」

「二年の予定で行ってますから、あと一年と十ヶ月です。始まったばかりですね」

「一年と十ヶ月……長いですね」

「本当は親子三人で大阪へ行こうかとも考えたんですが、二年間なんてあっという間だと思えましたし、江里香の環境を変えるのはどうかと思ひまして。お友達と離ればなれになるのも寂しいでしょうし……。それが裏目に出たようです」

「裏目かどうかはともかく、このままでは内山さんは学校で孤立してしまうかもしれませんね。苛めにも繋がりがねません。もちろん、そうならないよう最善の努力は致しますが、ご家庭の協力も必要です。おうちではどんな風に話し合われていますか？」

「なるべく江里香の話を聞くようにはしていますが、特にこれといった話し合いは……」

麻里子は気恥ずかしさを感じた。

「そうですか……」と言って、谷本先生が顔を曇らせる。

谷本先生は明らかに気落ちしていた。麻里子にはその様子が、娘と正面から向き合おうとしない駄目な母親だと思われるように感じられた。

「とにかく、江里香のことは主人とよく話し合っ、本人にも言って聞かせるようにします。お忙しいところをありがとうございました」

深々と頭を下げ、麻里子は言った。顔が熱い。

「私の方でも内山さんの言動には充分気をつけるように致します」

何の解決策も見いだせていなかったが、強引に話を終わらせ、麻里子は逃げるようにして小学校をあとにした。自分が恥ずかしかった。反対に、谷本先生が眩しく見えた。江里香のことを真剣に考えてくれているのが伝わり、安心した。少なくとも学校にいる間は心配なさそうだ。問題は学校が終わってから――

学校からの帰りに駅前の商店街による。一度、中間にある我が家に戻ってもよかった。公園の角を曲がればすぐだ。が、麻里子はそのまま駅へと向かった。帰ったところで誰かが待っている訳でもなかった。

駅前の商店街は夕飯の買い物客で賑わっていた。どういう訳か肉屋の前だけが空いていた。今のうちにと、肉屋での買い物を急ぎ、続いて八百屋に寄る。ふたり分の食材だから買い物は早く済んだ。帰って夕食の準備を始める。今晚の献立は江里香が一番好きなビーフカレーにした。江里香がピアノ教室から帰ってくる頃には出来上がっているだろう。

食材を切り揃えて炒め、煮込み始めた頃、玄関から「こんにちは」と声がした。隣家の敏子の声だった。ここに住み始めてからなので、かれこれ十年の付き合いになる。四十後半で、噂話を聞くのもするのも好きな女性だ。話が長くなるかもしれないと思った麻里子は一旦火を止め、玄関へ小走りで向かった。

玄関を開けると、敏子は周りには誰もいないというのに声を潜めた。これからとっておきの秘密を話すわよ、という顔をしている。いつもは近所のどうでもいい噂話を面白可笑しくするのだが、今日は雰囲気違っていた。目が真剣だった。

「江里香ちゃんは？」

奥を覗き込むようにして敏子は訊いた。

「まだ帰ってませんけど……」

「そう、ちょうどよかった。子供にはあまり聞かせたくない話なのよ」

いったい何だろう。

麻里子が怪訝そうな顔を見ると、敏子は話を続けた。

「知ってる？ 駅前のお肉屋さんのこと」

「〈肉の竹村〉のことですか？ 何かあったんですか？」

ほんの十分ほど前に買い物をしたばかりだった。鍋の中に買ってきたばかりの牛肉が入っている。敏子の顔つきからして悪いニュースに違いなく、麻里子は固唾を呑んで次の言葉を待った。

「さっき聞いたばかりなんだけど……食品偽装をしているらしいわよ」

「ええっ」

麻里子は耳を疑った。〈肉の竹村〉は商店街の中でも古株で、大将は小太りの、愛嬌のある人だ。店の前は名物のコロッケを買う人でいつも混み合っている。だからか——今日、〈肉の竹村〉に寄った際、敏子の話を裏付けるかのように、賑わっているはずの店先に買い物客の姿はほとんどなかった。

「消費期限の過ぎた肉を売ったり、外国の肉を国産と偽ったり、ひと頃ニュースでよくやっていたでしょう、こんな身近なところで起きるなんて世も末ね。もうあそこでは買わないようにするわ」

〈肉の竹村〉は、食品偽装などとは無縁だと思っていたし、疑いすらしなかった。大将と親しく話をしたことはないが、接客から受ける印象では誠実な好人物だった。私欲のために客を騙すとはとても思えない。しかし、吐き捨てるように言う敏子を見ていると、まんざら嘘でもなさそうだった。そこまで言うからには何かの確証があるのだろう。

「どうして食品偽装のことが発覚したんですか？」と、麻里子は訊いてみた。

「町内会の佐々木さんが教えてくれたのよ、駅前でばったり会って。佐々木さんが言うんだから間違いないわ。あなたも買わない方がいいわよ。腐った肉なんか食べさせられたんじゃ堪らないもの。江里香ちゃんは育ち盛りだし、どんな影響があるか分からないわよ」

「そうですね……」

佐々木さんが言うから、というのが納得いかなかったが、麻里子はともかく相槌を打った。

「まったく……元甲子園球児が聞いて呆れるわ。真面目な人だと思っていたのに」

言いたいことを言うと、敏子は満足そうな笑みを浮かべて玄関を出て行った。食品偽装がさも真実であるかのように敏子は話したが、所詮、確証のない噂話に過ぎなかった。元甲子園球児というも関係のない話だ。それでも、一家の食の安全を預かる主婦としては見過ごせなかった。変なウィルスに冒されているかもしれない、万が一のことを考えるとやはり怖い。

台所へ戻り、コンロの鍋を覗き込む。ほんのりと湯気が立っていて、煮込むだけになっていた具材が入っている。〈肉の竹村〉で買った牛肉も入っている。

外国産の安い肉を高級国産肉と偽ったのなら、不愉快ながらも我慢して食べただろう。棄てるのはもったいない。しかし、傷んでいるかもしれないと思うと、もう食べる気がしなくなった。

〈肉の竹村〉に文句を言いに行こうかと思う。だが、やめた。まだ確証のない噂話に過ぎない。不正行為があったとハッキリしたら文句を言いに行くことにして、ゴミ箱に棄てたレシートを保管することにした。

結局、麻里子はビーフカレーを諦め、鍋の中の食材を生ゴミ入れに棄てた。冷蔵庫を開けて残りの食材で何が出来るか考える。が、もはや料理をすることにも意欲をなくしていた。麻里子はデリバリーのピザを頼むことにした。ピザも江里香の好物だ。

三十分ほどして江里香がピアノ教室から帰ってきた。ピザの話をする予想どおり、江里香は大喜びをした。屈託のない笑顔——父親と離れて暮らしている寂しさを抱えているようには見えなかった。

江里香は食器棚からコップを取り出し、冷蔵庫のオレンジジュースを注いだ。

「ピアノはどう？ 巧くなった？」

「なったよ。もうバイエルは卒業」

江里香がゴクゴクと、オレンジジュースを旨そうに飲む。

「そう。頑張ったわね」

江里香を見つめ、学校での出来事など、たわいのない話を続ける。谷本先生に会った話をしなければいけないと思っはいたが、麻里子はなかなか切り出せなかった。

飲み干したコップをシンクに持って行き、江里香は洗い始めた。

「どうしたの？ これ」と、生ゴミに目をやって言う。

「ああ、それ。ちょっとね」

子供の耳に〈肉の竹村〉の話をしたくなかった。肉嫌いになられては困る。

「お肉にタマネギ、にんじん、じゃがいも……カレーを作る予定だったの？」

「そうよ」

「ピザよりカレーの方がよかったな」

江里香が不満そうな顔を見せる。その顔が笑った。

「分かった。失敗したからピザなのね」

「そうなの。もう少ししたらピザ屋さんに電話するわね」

恥ずかしそうに、麻里子はドジな母親の演技をした。

江里香が表情を変えた。今度は不審そうな顔になっている。

「でも、ママが失敗するなんて変ね。今まで一度もないじゃない」

「たまには失敗するわよ。いつもとちょっと味を変えようとしてみたの」

「ふうん……もったいない」

そう言いながらも、江里香はまだ納得しかねる顔をしていた。日頃から食べ残しを注意しているだけに、親として立つ瀬がなくなった麻里子はいよいよ言い訳をしてしまった。

「本当のことを言うとね、お肉が傷んでたの。だからもったいないけど棄てちゃったのよ。病気になったら大変でしょ」

「お肉が傷んでたって……ひょっとして駅前のお肉屋さんで買ったの？」

「そうだけど。〈肉の竹村〉……何か知っているの？」

「うん。腐ったお肉を売ってるって話でしょ」

噂は子供たちにまで広まっているようだ。そこまで広まっているということは、食品偽装が真実かどうかには拘わらず、〈肉の竹村〉は大変な状況を迎えることになるだろう。大将の人懐っこい笑顔を思い浮かべると気の毒な気もしたが、だからといって不正が本当なら赦せる話ではない

。「だけど、そんなの嘘だよ」と、唐突に江里香が言った。

「えっ？」

麻里子は江里香をじっと見つめた。江里香の信じて疑わない物言いに胸がざわめく。

「どうして嘘だと言えるの？」

「だって……」

言葉を濁し、江里香はダイニングテーブルを離れてリビングのテレビを点けた。

麻里子は呆然とするばかりだった。

江里香は〈肉の竹村〉の話の、核心部分を知っている――。

自分の娘が張本人かもしれない——そう思うと、麻里子の胸は張り裂けそうだった。そんなはずがないと打ち消してみても、江里香のこれまでの言動を考えると、どうしてもそう思えてしまう。間違いであってくれと祈るような気持ちだった。問い質してハッキリさせなければならないのは分かっていた。しかし、麻里子は行動に移せなかった。娘の口から、私が犯人よ、と打ち明けられるのが怖かったし、たとえ江里香が否定したとしても、それを自分が信じ切れなそうで怖かった。

陰鬱な気分でピザ屋に電話する。江里香の観ていたテレビアニメが終わる頃にピザは届いた。待ちきれないとばかりに江里香がダイニングに駆けてくる。注文したのはミートピザとサイドメニューのポテト。蓋を開け、ピザを皿に取り分けると、江里香は口いっぱい頬張った。

「美味しいね」と、ニッコリ微笑んで言う。

〈肉の竹村〉に対して罪の意識を持っていないように見える。それは無関係だからだろうか。それとも、もう十分に騒ぎを愉しんだからだろうか。

「ママは食べないの？」

「あとで食べるわ。いろいろ考えることがあって……」

江里香が食べるのに夢中で、麻里子はしばらく間を取った。

「さっきの話なんだけど……」と、頃合いをみてさりげなく話を始める。

やはり事実を確かめておかねばならないと思った。

江里香が次のピースに手を伸ばす。その話しはしたくないとの意思表示に思える。

「駅前のお肉屋さん、〈肉の竹村〉の噂話が嘘だってどうして知ってるの？」

江里香の目をじっと見つめて麻里子は訊いた。しかし江里香は目を合わそうとしなかった。手に持ったピザを見ている。

「大変なことになっているのよ。傷んだお肉を売ってるって噂をみんなが信じて〈肉の竹村〉に行かなくなるかもしれないの。お隣の敏子さんも噂を信じて、もう買わない、って言ってたわ。このままだと〈肉の竹村〉がどうなるか分かるでしょ？」

「お客さんがひとりも来なくなる」

ポツリと江里香が答えた。

「ひとりも来なくなるとどうなる？」

「お店は潰れちゃう」

江里香の手がポテトに伸びた。ケチャップをつけ、口に放り込む。

「それがどういうことなのか分かる？」

麻里子の声が少し荒くなる。

「分かってるよ。お仕事がなくなって、お給料がもらえなくなるでしょ」

「そう。そうになると何も買えなくなるのよ。お洋服だって、ピザだって、ピアノ教室にも通えなくなるのよ」

それまで目を合わせなかった江里香が母親を見据えた。

「そんなこと分かってるよ。江里香に何か関係がある訳？」と不機嫌そうに言う。

麻里子は江里香の目に圧倒された。

信じられないの？　と言っているように見える。そしてまた、開き直ってシラを切り通そうとしているようにも見える。

「関係があるかどうか分からないから話をしてるのよ。本当に関係がないのね？」

「ないわよ。ある訳ないじゃん」と言って、江里香はポテトを無造作に搦んだ。

本当に江里香が言い広めたのではないのだろうか――。

麻里子は自分が情けなくなった。やはり江里香のことを信じてあげることが出来ない。娘の考えていること、思っていることがよく分からない。夫の貴志は前々からそんなことを言っていた。男と女で性別が違うからだろうと思い、母親である自分は理解しているつもりだった。それが母親の強みだと思っていた。ところが、今の自分は同じ性別の娘を捉えきれないでいる。

「そんなことより……」と、江里香が話を始めた。不機嫌だった顔は消え、目が輝いていた。何かを期待する目だった。

「江里香のお誕生日会にお友達が来るんだけど……」

「来週の水曜日でしょ、忘れてないわよ」

「それでね……お誕生日会にパパも帰ってきてくれないかなあ、と思ったんだけど」

「それは無理よ」

麻里子は言下に否定し、眉根を寄せた。父親が大阪からしばらく帰ってこられないことは前にも言ってある。分かっている江里香は、わざと困らせようとしているようだ。信じてあげなかったことへの腹いせだろうか。

「どうして？ 新幹線で帰ってくればすぐじゃない」

腑に落ちないといった顔で江里香は母親を見ている。

「そんなに簡単にはいかないの」

「どうして？」

「みんなで一緒にお仕事をしてるんだから、パパだけが勝手に東京に帰る訳にはいかないの」

これも前に言って聞かせた話だった。何度も言っており、江里香が忘れていないはずがない。

「どうして駄目なの？ いいじゃない、一日くらい。江里香のお誕生日なのよ」

江里香が反発する目を見せ、麻里子は苛立ちを覚えた。

「誕生日だからって……」

努めて平静に話そうとする麻里子に、江里香が口を突き出す。

「どうして？ ねえ、どうして？」

江里香の挑発するような“どうして”が続き、麻里子の苛立ちは頂点に達した。

「駄目なものも駄目なの！」

麻里子の大きな声に驚き、江里香が泣きそうな顔になった。椅子から飛び降りて駆け出し、自分の部屋に隠れる。

カッとなって怒鳴ってしまい、麻里子は自己嫌悪に陥った。記憶にない、嫌な叱り方だった。江里香の部屋の前に立ち、外から声を掛ける。

「ごめんね。少し言い過ぎたわ。ねえ、江里香ちゃん、聞こえてる？ パパにお願いしてみるわ、江里香のお誕生日だからちょっとだけ帰ってきてって。でもね、パパがどうしても無理って言ったら諦めるのよ、いい？」

江里香の返事はなかった。

ダイニングに戻って腰を下ろす。

麻里子は自分が嫌で堪らなかった。

江里香を感情にまかせて怒鳴ったことといい、問題の解決を夫に委ねたことといい、自分が恨めしかった。

冷めたピザを食べると、涙が零れた。

江里香は好きなテレビ番組の時間になっても部屋から出てこなかった。一度だけ風呂に入りに出てきたが、入浴が済むと、おやすみなさい、と小さな声で言って、すぐにまた自分の部屋に戻ってしまった。いつもなら、もう寝なさい、と言うまでテレビにかじりついているのに――。麻里子は不意に訪れた独りぼっちが寂しくてならなかった。

ダイニングからリビングに向かう。その途中に電話がある。

夫の声が聞きたかった。もう仕事を終え、家に帰っている時間だった。

「もしもし……仕事はどう？」

「相変わらずだよ。得意先回りの毎日。歩き通しでくたくただ」

「そう。大変そうね」

「大変なのはお互い様だよ。それより何？」

「うん……江里香のことなんだけど」

「やっぱり。様子がおかしいって言ってたから気になってたんだ。それで、今度はどんな嘘を？」

」

「担任の谷本先生が不倫してるとか、早紀ちゃんのお母さんは本当のお母さんじゃないとか……」

」

「何だか段々タチが悪くなっているようだな」

「そうなのよ。それで今日、谷本先生に相談に行ってきたの。先生も気にしてらしたわ。学校でもいろいろ嘘を吐いているみたい」

電話の向こうで貴志が溜め息を漏らした。

「困ったな、あんないい子だったのに」

「あなたが大阪に行ってしまったから寂しいのよ」

「寂しいって感じてくれるのは嬉しいけど、それが変な風に現れるのは考えものだ」

麻里子は〈肉の竹村〉の話をするかどうか躊躇した。が、今はまだ話さないことにした。余計な心配を掛けたくなかったし、江里香が関与しているかどうか、判然としていない。それよりも話しておくべきことがあった。貴志の返事は分かり切っていたが、江里香と約束した以上、一応訊いておかねばならなかった。

「それでね、来週の水曜日、江里香の誕生日なんだけど、江里香がどうしても帰ってきて欲しいって言ってるのよ」

「そんなの無理だよ。言ってるじゃないか、休日は変則的だって。そのくらい、江里香も分かってくれていると思ったんだが……」

「分かっている言ってるんだと思うの。わざと困らせて……」

「わざと？ 反抗期ってやつか」

「多分ね。あなたの転勤が切っ掛けになったのよ」

「転勤のことを言われてもな……僕にはどうしようもない。とにかく僕から江里香に話してみる。まだ起きてるだろう？」

「ええ、すぐに呼んでくるわ」

麻里子は電話を保留にすると、江里香の部屋へ急いだ。ノックをして呼び掛ける。

「江里香ちゃん、パパから電話よ」

ドアが勢いよく開かれる。

「本当？」と、江里香が満面の笑みで駆け出し、受話器を持ち上げる。

娘と夫が電話で話している様子を麻里子は離れて見ていた。そこから動けなかった。もうすぐ江里香は怒るか泣くかして、ここへ戻ってくる。そんな江里香をどうやって慰めたらいいんだろう。

麻里子は受話器を持つ江里香を凝視した。

嬉しそうにしていた顔が曇る。何か言っている。何かを訴えている。

江里香が受話器を置いた。泣き出しそうだ。

俯きがちに戻ってくる。

「パパは何だって？」

訊くのは残酷な気もした。訊くまでもない。貴志が何を言ったのかは分かっている。しかし、訊かずにはいられなかった。江里香に現実を認識して欲しかった。

どうにもならないことが世の中にはたくさんあるのよ。

俯いていた江里香が顔を上げる。

麻里子は驚いた。そこにあったのは、はち切れんばかりの、江里香の笑顔だった。

「帰ってくるって、お誕生日会に」

大阪から帰ってくる———どうということだろう。

「パパは本当にそう言ったの？」

「本当だよ」

部屋の前に立つ麻里子の横をすり抜け、江里香が部屋の中に入る。

麻里子の頭は錯綜していた。夫が果たされるはずの約束をするはずがない。何か起死回生の方策を思いついたのだろうか。それとも一時凌ぎのために、江里香に嘘を吐いたのだろうか。娘の嘘に苦しめられている夫が、娘に嘘を吐くとは思えないが——

電話は切れていた。受話器を持ち上げ、リダイヤルボタンを押す。

「もしもし……」

「麻里子、どうしたんだ？ まだ何か？」

「うん。江里香が言ってたんだけど……大阪から帰ってくるの？」

「帰る？ 誰が？」

「あなたよ。お誕生日会にパパが帰ってきてくれるって、嬉しそうに話していたわ」

「そんな……ああ」と、貴志が落胆の溜め息を漏らした。

「違うのね？」

「当たり前じゃないか。そんな約束をするはずがない。来週は奈良から和歌山を回る予定になっているんだ。催事もあるし、取引先との宴席もある。そのことを詳しく話したのに分かってくれなかったのか。お誕生日会は無理だけど、必ず近いうちに休みをもらって帰るからって言ったんだ、埋め合わせにね。それで納得してくれたと思ったんだが……」

「どういうつもりかしら？」

「嘘を吐いて現実から逃避しているんだろうな」

「現実からの逃避……」

麻里子の声は沈んだ。江里香が自分から逃げていく気がする。

「そんなに深刻になる必要はないんだろうけど、呑気に構えてもいられないな。とにかく江里香から目を離さないでくれ。僕もなるべく早いうちにそっちへ帰るようにするから」

「きつとよ」

「約束する」

夫の言葉に安堵を覚え、受話器を置いて江里香の部屋を見やる。ドアは固く閉ざされていた。

翌日、麻里子は気になっていた〈肉の竹村〉へと向かった。

昼時、駅前に人通りは多かった。しかし、忘れ去られたように〈肉の竹村〉の前だけが閑散としている。近づいてみると、肉を陳列したケースの奥で、不機嫌そうな顔の大将が暇を持て余していた。なるほど、改めてみると元甲子園球児らしく、がっしりとした体軀をしている。

壁に張り紙があった。

『当店におきまして、いわゆる食品偽装が行われていたかのような噂がありますが、根も葉もないデマです。悪質なイタズラです。誠心誠意を持ってお客様と接して参りましただけに残念でなりません。お客様におかれましては、どうぞ安心してお召し上がりください。これからもどうぞよろしくお願いいたします』

五十歳くらいの主婦が、張り紙を呼んでいた麻里子の横から顔を出し、大将に話し掛けた。

「やっぱり嘘だったのね。大将がそんなことをするはずがないから変だと思っていたのよ」と、心から同情して言う。

常連さんのようだ。渋面だった大将の顔が少しだけ和らいだ。

肉を選んでいる振りをして、麻里子はふたりの会話に耳を傾けた。

「私も、変だと思ったんですよ。いつもどおりに商売をしていただけなのに、パタッとお客さんが来なくなってしまったんですから。妙な噂が流れているのを知ってびっくりしました。信用第一にやってきたのに粗悪な肉を扱っているとか、消費期限が切れているとか、ありもしない話をされたんです。堪りませんよ」

常連さんへの気安さで笑顔を見せながらも、大将の口調には悔しさが滲んでいた。

「本当に酷い噂を流されたわよね。かなり影響があったんでしょう？」

「そりゃもう。この二、三日、売上げはいつもの半分以下ですよ。張り紙を出したというのに、お客さんはなかなか戻ってきて切れません。この張り紙すら信用してもらえないのかもしれないですね。一度悪いイメージがつくと挽回するのは至難の業で……」

「大変ね。あたしがいい噂を広めてあげるわよ。〈肉の竹村〉は安心、安全で美味しくて、日本一ってね」

「そう言っただけだと有り難いです。一時はどうなるかと思いましたが、お客さんのような方がいてくださると本当に助かります」

大将が慇懃に頭を下げる。

「そんな大層なことじゃないわよ。当然じゃない。それにしても何のためなのかしらねえ。商売敵のあそこじゃないの、噂を流したのは。商店街の奥にある……」

「違いますよ。あそこじゃありません。仲良くさせてもらっています。こんな卑劣な真似はなさいませんよ」と、大将は毅然と言った。

「そうなの？ それだけハッキリ言うということは……大将は噂の出所を知っているみたいね」

主婦が好奇心に目を輝かせる。

「ええ、まあ……」

言いにくそうにする大将に、主婦はお構いなしだった。

「誰？ 言いふらしたりしないから教えてよ」

さっき噂を言い広めると言ったばかりで、さすがに大将も困惑していた。しかし、味方になってくれそうな主婦の機嫌を損ねたくなかったのだろう、大将は声を潜めた。

「ここだけの話ですよ」と、ためらいがちに話を始める。

いいから話を続けて、と主婦が顔を近づける。

「小学生だったんですよ、噂の出所は」

小学生——聞き耳を立てていた麻里子は目の前が真っ暗になり、息が止まりそうだった。

「小学生が？」と、主婦が驚きの声を上げる。

「今時の小学生はいろいろと知恵をつけていて、面白半分だったんでしょう。子供のやったことですから、警察には届けませんでしたけど……」

警察——その言葉が麻里子の胸に深く突き刺さる。実際に風評被害に遭った訳だから、子供がやったことではあっても、損害賠償を請求されてもおかしくない、立派な犯罪だ。

「小学生も大人みたいなことをするからね……」

小学生が犯人だったことに少なからず衝撃を受けたようで、主婦はそれ以上何も訊かずに買い物をして帰っていった。麻里子に初めて気づいたように大将が、いらっしゃいませ、と声を掛ける。

「あのう、張り紙のことなんですけど……」

「ああ、あれね。全くとんだ目に遭いましたよ」

「本当に小学生が？」

麻里子はおずおずと訊いた。

「聞こえていましたか。ええ、まあ、そうですね」

大将が警戒する素振りを見せる。それでも訊かない訳にはいかなかった。

「どんな小学生だったんでしょうか？」

「どんなって……申し訳ありませんが、それはちょっと。なにぶん相手は子供ですから。どうしてそんなことを訊くんです？」と、大将が逆に訊き返した。

その小学生が娘かどうか確かめたいんです——喉まで出掛かった言葉を抑える。

「済みません、変なことを訊いて」

麻里子は慌てて店を出た。振り返って頭を下げ、江里香のやってしまった行為を詫びる。商店街の人混みに紛れ、しばらくは〈肉の竹村〉には行けないな、とぼんやり考えた。

暗然としたまま日にちだけが過ぎていった。江里香の反抗的な態度は影を潜め、新たな嘘を吐くこともなかった——江里香の誕生日が来るまでは。

信じようにも信じられない出来事が江里香の誕生日に起こった。奇妙な出来事で、江里香が嘘を吐いているとしか思えなかったが、たとえそうであったとしても、とても説明のしようがない出来事だった。

麻里子はお誕生日会の準備を済ませ、江里香がお友達を連れて帰ってくるのを待っていた。手作りのケーキの甘い匂いが家中に漂っている。予想していた時間に玄関の呼び鈴が鳴り、てっきり江里香がお友達を連れて帰ってきたものと思った。だが、そこにいたのは早紀ちゃんを始め、今日招いた五人の女の子たちだけで、誕生日を祝ってもらう肝心の江里香の姿はなかった。

「いらっしゃい、さあどうぞ」

江里香はどうしたんだろう——漠然と思いながら、麻里子は女の子たちを家に招き入れようとした。しかし、女の子たちは玄関を上がろうとしなかった。早紀ちゃんはおもむきで、他の女の子たちも麻里子の視線を避けている。

「あのう、江里香ちゃんは帰ってますか？」と、早紀ちゃんが訊いた。済まなそうな、悲しそうな顔をしている。

「いいえ、まだよ」

麻里子の返事に、早紀ちゃんたちがサッと顔を見合わせた。

嫌な予感がする。

「一緒じゃなかったの？」

「一緒でした、学校から公園までは。でも、公園の角を曲がったら江里香ちゃんはいなくて……

」

「きっと公園にいるのよ。そのうち帰ってくるわ、さあ……」

笑顔を見せて上がるように促すが、それでも女の子たちは遠慮した。

「捜したんです、公園の中を。でもいませんでした」

「本当？ 変ね」

「公園だけじゃなくて近くも捜したんです」

女の子たちは今にも泣き出しそうだった。

「みんなを驚かせようとして、何処かに隠れているんじゃないの？」

麻里子は努めて明るく言った。せっかくのお誕生日会にメソメソされたのでは台無しだ。

「違うんです」と、早紀ちゃんが言い放った。他の女の子たちも頷く。

「違うって……何が？」

「喧嘩みたいになっちゃって、それで江里香ちゃんは先を走って……公園の角を曲がったら消えていたんです」

「消えた？」

「私がいけないんです」と、ひとりの女の子が声を上げた。江里香のクラスメイトだが、麻里子は名前を知らなかった。

「私が意地悪なことを言ったから……」

「そうじゃないわよ」と、早紀ちゃんが横から口を出す。

「そうよ、江里香ちゃんが嘘を吐くから……」と、また別の子が口を挟む。

また江里香は嘘を吐いた――。

「分かるように話してくれないかな」

要領を得ない女の子たちの話に、麻里子は苛つかされた。すると、みんなを代表するように、早紀ちゃんが話を始めた。

「今日のお誕生日会にパパが帰ってくるって江里香ちゃんが言ったんです。江里香ちゃんのお父さんが大阪にいるのはみんな知ってますから、そんなの嘘だって言うと、江里香ちゃんは嘘じゃないって言い張ったんです。それで、お父さんが帰ってこなかったらどうするのって話になって、そしたら江里香ちゃんは怒って、喧嘩みたいになっちゃって……」

「それで江里香は先を走ったのね。そして、公園の角を曲がったらいなくなっていた……」

「そうなんです。私たちも最初はふざけて何処かに隠れているのかと思ったんです。だけど、何処を捜してもいなくて……」

「分かったわ。とにかく、もう一度よく捜してみましよう。今頃は公園で遊んでいるかもしれないわ、みんなが来るのを待って」

麻里子が外へ出ると、女の子たちもついてきた。

公園までの道のりをぞろぞろと歩く。江里香が何処かにいないかと、周囲に目を配りながら公園へと向かう。午後三時過ぎの住宅街は閑散としていた。公園に着くまで、麻里子たちは誰とも出会わなかった。

公園内を手分けして捜す。ベンチの裏、樹木の陰、トイレの中、隠れられそうな場所は全て捜した。しかし、江里香は何処にもいなかった。公園にはいないようだ。範囲を広げることにした。公園の周りを北と南の二手に分かれて捜す。麻里子は早紀ちゃんともうひとりの女の子とで南側を捜した。北側もそうだが、公園の周りは住宅が建ち並んでいて、江里香が隠れられそうな場所はなかった。見ず知らずの人に家にお邪魔するとも思えない。だが——一棟の古びたアパートを眺めていた麻里子は、自分の脳裏に浮かんだ恐ろしい考えに、思わず息を呑んだ。

連れ去られた——。

白昼に忽然と消えたのだから、その可能性はある。

麻里子はよくない考えを追い出そうと頭を振った。そんなことがあるはずない、と自分に言い聞かせる。

「駅の方に行ったのかもしれないわ」

集合した五人の女の子たちとともに駅へ向かう。女の子たちは誰も口を開かなかった。黙り込んだままで麻里子のあとをついてくる。江里香との小さな喧嘩を後悔しているようだった。

駅の周辺と商店街の二手に分かれて捜す。

商店街の人や駅員に訊いても、江里香らしい小学生には覚えがないとの返事だった。江里香は駅の周辺にもいなかった。

何処へ行ったのだろうか。やはり公園の付近で誰かに連れ去られたのだろうか——。嫌な考えが再び脳裏に蘇る。

「一度、おうちに戻ってみましょう。ひょっとしたら帰っているかもしれないわ」

女の子たちが力なく頷く。どの顔も歩き回って疲労が浮かんでいた。

「きっと行き違っただけなのよ。心配しなくても大丈夫よ」と、声を掛けて励ましながら家路を辿る。女の子たちも、捜し回っている間に江里香が家に帰っているかもしれないと期待したようで、歩くスピードが次第に速くなった。

麻里子は勢いよく玄関の扉を開けた。

「江里香ちゃん、いる？」

返事はない。

さっきは遠慮して上がらなかった女の子たちが一斉に上がり込み、江里香の名前を連呼する。

それでも江里香の返事はない。

麻里子は女の子たちをリビングに残し、ひとりで家中を捜した。貴志の書斎も夫婦の寝室も物置も——それでも、江里香は何処にもいなかった。リビングに戻り、麻里子が沈痛の面持ちで首を横に振ると、女の子たちは落胆し、中には啜り泣く子もいた。麻里子も泣きたい気分だった。江里香から目を離さないと、夫と約束した次の日にこんなことが起きてしまった。

自分の責任だ。

電話の横の壁に貼られた父兄の連絡網を見ながら、江里香から名前を聞いたことのある、お友達の家電話を掛ける。その大半は留守で、繋がった家にも江里香は行っていなかった。女の子たちが、あの子のところかもしれない、と次々に口にす。他のクラスの子やピアノ教室の子など、教えてもらった番号に掛けたが、結局、二十軒近く掛けて全てが空振りだった。

女の子たちから江里香が行きそうな場所を訊く。ひとりの女の口からお寺や図書館などが上がる。ああ、そうそう、とみんなが頷く。最近は行ってないが、ちょっと前まではみんなで行ってたらしい。

お寺というのは妙だなと思ったが、飼われている犬が可愛くて見に行っていたということだった。お寺も図書館も学校の方にあり、江里香が公園から走っていった方角とは逆だった。家からも逆の方向で、わざわざ戻るとも思えなかったが、今はその可能性に期待するしかなかった。

女の子たちにジュースを配る。女の子たちは遠慮していたが喉は渴いていて、ひとりが口をつけるとみんなが飲み始めた。

「ここで待っててね」と、麻里子は言った。

ひとりで捜すつもりだった。女の子たちの手を借りたいのは山々だったが、疲れた顔を見ていると可哀想になった。

玄関を出ようとする麻里子に早紀ちゃんが近づいてきた。みんなで一緒に捜した方がいい、と提案する。その方が効率がいいのは分かってる。しかし、麻里子はやんわりと押し留めた。

「江里香が帰ってきて誰もいなかったら悲しむと思うの。今日は江里香の誕生日、みんなでお祝いをしてあげて」

早紀ちゃんは渋々承諾した。

麻里子は玄関を出て溜め息を吐いた。今度この玄関を入るとき、江里香は一緒なのだろうか。それとも――

お寺や図書館を回る。

犬と戯れる江里香も、本を読んでいる江里香もいなかった。職員に江里香の服装――赤いTシャツにデニムのスカート――の特徴を告げ、見なかったかどうかを訊いたが、職員は見えていなかった。小学生自体があまり来ていないらしい。もともと期待薄だったのでそれほど落胆はしなかったが、これで探す場所がほぼなくなってしまった。

麻里子は近くにある小学校を考えてみた。何か忘れ物をして戻ったのかもしれない——そう思うしかなかった。学校にいなかったら何処を捜せばいいのか、もう思いつかない。その場合、最悪の状況を想定しなければならないだろう。

江里香は学校にいる、いるはずだ。

強い意志を抱いて麻里子は学校の門をくぐった。校庭を見渡す。グラウンドに人の姿はなく、鉄棒のところには何人かの子供がいた。逆上がりの練習をしている。その中に江里香はいなかった。近づいて、女の子を見なかったかどうか訊く。江里香の服の特徴を告げる。しかし、そこにいる子供たちは、知らないと言った。ここ三十分の間、学校を出る生徒はいても入ってくる生徒はいなかったと言う。すでに陽は西に傾きつつあった。

やはり学校にもいないのか——。

何処を捜せばいいのか。どうすればいいのか。

さすがに気落ちした。教室を風潰しに捜そうかと思った。そのとき、麻里子に声を掛ける人影があった。谷本先生だった。

「どうかなさったんですか？」と、怪訝そうに訊く。

「江里香を、江里香を見ませんでしたか？」

「内山さん？ いいえ。早紀ちゃんたちとずいぶん前に帰りましたが……一時間くらい前でしょうか。内山さんがどうかしたんですか？」

学校にもいないようだ——。

麻里子の中で、儂い望みが音を立てて崩れる。

「いないんです、何処にも」

「いない？ どういうことですか？ 今日は内山さんのお誕生日会って聞いてますけど」

「ええ、そうなんです。それで早紀ちゃんたちと一緒に帰ってたんですが、途中で江里香ははぐれてしまったらしいんです。あちこち、駅の方も捜したんですがいなくて、ひょっとしたら学校に戻ってるんじゃないかと思ひまして……」

麻里子が悲痛に顔を歪めて話をすると、谷本先生も眉をひそめた。

「とにかく、手分けして捜してみましよう」

残っていた教職員にも手伝ってもらって学校中の捜索が行われた。だが、江里香の姿はない。

「今頃はおうちに帰っているかもしれませんよ」と先生のひとりが慰めに言う。

麻里子は携帯から家の電話に掛けた。ふと、江里香に携帯を持たせておけばよかった、と思った。今さらそんなことを思っても遅い。

呼び出し音が鳴る。受話器を取る音がする。

「もしもし……」と、女の子の声がした。一瞬、江里香が帰ってきたと思った。しかし、電話の声は早紀ちゃんだった。

「江里香は帰ってきた？」

「ううん、まだ」

電話の向こうで啜り泣く声が聞こえる。

「お寺にも図書館にも……学校にもいないみたい」と麻里子が言うと、それを早紀ちゃんがみんなに伝え、啜り泣く声が一段と大きくなった。

江里香が行きそうな、別の場所に思い当たりにないかどうかを聞くと、早紀ちゃんは申し訳なさそうに、もう思いつかない、と答えた。

「もう一度、公園を中心に搜索してみましょう」

谷本先生の提案で公園に向かうことになった。残っていた教職員も搜索に同行し、近くに住む同じクラスの父兄にも協力してもらって公園の周りを四方に捜した。搜索範囲を駅の向こう側にも広げた。それでも江里香は見つからなかった。

今後の対策を講じるために、一旦、麻里子の家に戻ることになった。一様にみんなの顔は沈んでいた。表だって口にはしないが、誰もが単なる失踪とは考えていなかった。何らかの事件に巻き込まれたに違いない——といった顔をしていた。

古びたアパートの光景が蘇る。過去にあった変質者による、幼児誘拐のニュースが頭をよぎる。どんな目に遭わされたかと思うと、麻里子の胸は張り裂けそうだった。

陽は西に傾き、空を赤く染め始めていた。江里香がいなくなってから二時間以上が経っていた。

出来れば夫に心配を掛けたくなかった。何事もなかったかのように、ひょっこり江里香が出てきて万事解決——そうなるのを願っていたが、それは叶わないようだ。騒ぎがここまで大きくなったからには、夫に何も報せないでおくことは出来なかった。

貴志の携帯に電話を掛ける。しかし、呼び出すが貴志は出ない。きっと忙しいのだろう。留守番電話サービスの案内が流れ始め、あとで掛け直そうと思って麻里子は電話を切った。出てくれなかったことに何処か安堵していた。

麻里子の家に集まった教職員の総意は、もう警察に任せるしかないだろう、という結論に達した。麻里子にも異存はなかった。江里香の失踪状況から考えられるのは誘拐だけだった。

「変な人とか車とか、見なかった？」と、谷本先生が早紀ちゃんに訊いた。

早紀ちゃんは首を振った。他の女の子たちも同じ動きをした。

麻里子が警察に電話を掛けようとしたそのときだった。

家の電話が鳴った。

誘拐犯からだろうか――。

「もしもし、内山です……」

麻里子は緊張した。居合わせている全ての人の視線が電話に注がれる。

「もしもし、こちら東京駅の鉄道警察ですが……」

東京駅？ 鉄道警察？

電話の相手が誘拐犯でなかったことに安心したが、どうしてそんなところから電話が掛かってきたんだろうと、新たな疑念が湧いた。

「そちら、内山江里香ちゃんのお宅ですよ？ 江里香ちゃんのお母さんですか？」

「ええ、そうですが……」

「江里香ちゃんをこちらで保護しております。迷子になられたようで、今からそちらに送り届けますので……」

警察に保護された――。

安堵で涙が止まらない。

江里香は公園から駅へと向かい、そのまま東京駅へ行って迷子になってしまったようだ。

みんなが笑顔で喜び、早紀ちゃんや女の子たちは歓声を上げた。谷本先生は嬉しそうに涙を浮かべていた。

「無事に見つかってよかったですね」と、目元を拭きながら言う。

「ありがとうございました」

先生にお礼を言い、協力してくれたひとりひとりに向かって麻里子は頭を下げた。

「お陰様で、ご心配をおかけしましたが、解決しました」

誘拐事件が一転して単なる迷子と分かり、みんなの心は安堵に浸っていた。騒動が思いがけない形で解決し、捜査に協力してくれた人たちが麻里子の家をあとにする。残ったのは谷本先生と早紀ちゃんだけになった。リビングでお茶を飲みながら、三人は江里香が帰ってくるのを待った。どの顔にも自然と笑みが零れる。

「本当にありがとうございます。正直に言いまして、江里香は誘拐に遭ったんじゃないかって本気で思い始めていたんですよ」

谷本先生に改めてお礼を言い、麻里子は小さな溜め息を吐いた。

「私もそうです。どうしたらいいんだろうって思っていました。誘拐じゃなくてよかったですね。迷子でよかったというと語弊がありますが……」

「いいえ、迷子で済んでくれて助かりました」

「迷子って心細いんだよ」と、早紀ちゃんが会話に入ってきた。迷子になったことのある先輩として話をしたいようだ。

「早紀ちゃんも迷子になったことがあるのね」と、微笑みながら麻里子は言った。

「うん。三つの頃、ショッピングセンターで。周りの景色は覚えてないけど、独りぼっちで寂しかったのは覚えてる」

東京駅で江里香も寂しかったことだろう。いや、独りぼっちで寂しかったのは我が家にも感じていたのかもしれない。江里香は我が家の中にも迷子になっていた。それを自分は気づいてあげられなかった――。

「それにしても、よく東京駅までひとりで行けましたね。乗り換えがあって子供には複雑だと思うんですが、以前、一緒に行かれたことがあったんですか？」と、谷本先生が不思議そうに訊く。

「いいえ、一度も。最近はふたりで電車に乗ることもほとんどありませんでした。そういえばちょっと変ですね。江里香がひとりで東京駅まで行けるとは思えませんが……。早紀ちゃんはどう？ ひとりで行ける？」

早紀ちゃんは首を振った。

「何処で乗り換えたらいいのかよく分からない。それにひとりじゃ怖いわ」

「そうよねえ。江里香も同じだと思うんだけど……」

あまり電車に乗ったことのない江里香が、ひとりで東京駅へ行ったと考えるのは難しかった。だが、割に行動的なので、誰かの助けを借りたのだろうと思った。

「近くにいる人にいろいろ尋ねながら行ったのかもしれないね」

「ああ、そうかもしれませんね」と、谷本先生が頷く。

「でも、どうして東京駅なんかに行ったのかしら……」

今度は麻里子が不思議そうに言った。

すかさず早紀ちゃんが口を挟んだ。

「お父さんを迎えに行ったんだと思うよ。帰ってくるって言ってたから」

麻里子は虚を衝かれた思いがした。

そうだった。江里香は、父親がお誕生日会に帰ってくると言い張っていた。それが叶わないことは本人も知っていたはずだ。叶わないと知りつつ、東京駅まで迎えに行ったのだろうか。

「お父さんが帰ってこられるんですか？」と、谷本先生が狐につままれたような顔で訊く。

「嘘なんです。今日はどうしても帰ってこれないって江里香には言っているんですが、信じたくないのか……」

「お父さんに会いたかったんですね……」と、谷本先生が呟く。

「そうですね」

麻里子も小さな、沈痛な声で応える。

「江里香が嘘を吐いてばかりで申し訳ありません。今日の騒ぎにしても、あんな嘘を吐かなければ起きなかったと思うんです。父親が大阪から帰ってくるなんて嘘を吐かなければ……早紀ちゃんにも先生にも迷惑を掛けて……」

早紀ちゃんが黙って、いいえ、と首を振る。それはまるで大人のような仕草だった。

「本当にもう……いろんな人に迷惑を掛けてしまって……申し訳なく思っています。先生たちばかりか、お肉屋さんにまで迷惑を掛けてしまって……」

谷本先生や早紀ちゃんが〈肉の竹村〉の話を知っているかどうかは分からなかったが、遅かれ早かれ知ることになるだろうし、このふたりもそのことで嫌な思いをしているに違いない——。麻里子はこの場で謝っておきたかった。

「お肉屋さん？」

谷本先生が怪訝そうな顔をする。先生は〈肉の竹村〉の噂を知らないようだ。

「駅前のお肉屋さん、〈肉の竹村〉で食品偽装の話があったんですが……もちろん嘘でした」

「それが江里香ちゃんと関係あるの？」

早紀ちゃんも不審そうな顔を覗かせる。

早紀ちゃんまでもが知らないようだ。意外にも、噂はそれほど広まっていないのかもしれない。

自分の娘の罪を告白するのは辛かった。しかし、正直に話した方がいい。大将に犯人を罰しようという意志はなかったようだし、目の前のふたりも江里香を拒絶することはないだろう。悲しいことだが、ふたりとも江里香の嘘には慣れている。

「肉が傷んでいるとか、産地が違うとか、江里香がそういった話を広めたいらしいんです。もちろん嘘です。〈肉の竹村〉にはご迷惑をお掛けしました。あんなに賑わっていたのに……」

「ちょっと待ってください」と、谷本先生が麻里子の言葉を遮った。

「何か誤解なさっているようですね」

「江里香ちゃんじゃないよ」と、早紀ちゃんも先生に加勢するように言う。

「江里香じゃないって、それじゃ……」

大きな過ちを犯した気がする。

「男の子なんです」と、谷本先生が言う。

「男の子？」

「少年野球をやっている子なんです…… 〈肉の竹村〉のご主人が少年野球のコーチをなさっているのはご存じですか？」

「いいえ、知りません」

元甲子園球児だったということは聞いているが――。

「そのチームの子なんです。私のクラスの子でもあるんですが、コーチに練習態度を怒られて、それを逆恨みして、それであんな嘘を吐いたらしいんです。腹いせに言ったそうですが、チームのひとりに吐いた嘘があつという間に広まって、怖くなって私のところに来ました。それで一緒にお詫びに行ったんです。ですから、江里香ちゃんは何も関係ないんです」

江里香は関係がなかった——。麻里子の躰から力が抜けた。

「関係なくはないよ」と、早紀ちゃんが言った。

「あら、どうして？」と、先生が訊く。

「だって、江里香ちゃん、その男の子が好きだったの。男を見る目がなかったって言った。——わたしが言ったってことは内緒だよ」

早紀ちゃんのませた口振りに、麻里子も谷本先生も笑みを零した。

「何かホッとしました。駄目ですね、私は。小学生と聞いただけで江里香を疑ってしまいました。好きな子がいるのも知りませんでした」

麻里子の言葉に谷本先生が小さく頷いた。

「私も分からないことだらけです。自分にも子供だった時代があるのに、すっかり忘れてしまっていて、どう接したらいいのか、毎日が勉強です」

「先生はよくやってる方だと思うな」と、早紀ちゃんがこまっしゃくれて言う。

麻里子も谷本先生も顔を見合わせ、吹き出した。

「それはどうも。お褒めいただいて光荣です」

本当だよとムキになって言い、早紀ちゃんは他の先生の寸評を始めた。なかなかの話し上手で、ふたりの大人は聞き入った。谷本先生が頷いているので、早紀ちゃんの評価は当たっているのだろう、と麻里子は思った。

話が一段落し、今日のこれからのことが話し合われた。遅い時間になってしまったが、江里香のお誕生日会を四人で行うことに誰も異存はなかった。

表で車の停まる音がした。江里香が帰ってきたようだ。

早紀ちゃんがまず駆け出し、そのあとに麻里子と谷本先生が続いた。

「ただいま」

騒ぎを起こしたというのに悪びれもせず、江里香が玄関を上がる。

「早紀ちゃん、先生もいてくれたんだ」と、上機嫌の声で言う。

そのまま三人はリビングに向かった。麻里子は送ってくれた警察官に挨拶するために外へ出た。そこにはひとりの若い男が立っていた。制服を着た警官がいるものと思っていた麻里子が訝しげにお辞儀をすると、男は身分証を提示した。

「ちょうど勤務が終わりました、ついでにお嬢さんをお送りしました」

表の道路を見ると、パトカーではなく自家用車が停まっていた。

「遠いところまでわざわざ済みませんでした」

「いいえ、僕の家とは割と近いですし、職務ですから。それよりもお母さんにお訊きしたいことがあるんですが……」

警察で江里香が何かしでかしたのだろうか。また何か嘘を吐いたのだろうか。

麻里子は不安に苛まれた。

「何でしょうか？」

「お嬢さんを八重洲口の構内で保護したんですが、新幹線に乗って大阪から来た、と言うんです」

「大阪から？ どうしてそんなことを言ったのかしら。それはあり得ません。江里香がいなくなって二時間ちょっとしか経っていないんです。何を考えているんでしょう、あの子は。本当に申し訳ありません」

江里香はまた嘘を吐いた。しかも警察官を相手に――。

「やはりそうでしたか。妙だと思ったんです。お嬢さんが乗ってきたと思われる新幹線の乗務員の、誰もが覚えがないと言いますし……小さな女の子がひとりで乗っていたら目につきますからね。それから、新大阪の駅でパパにお見送りしてもらったと言ってましたが、これも作り話ということなんでしょうね？」

「申し訳ありません」

麻里子は平身低頭するしかなかった。

「主人は単身赴任で大阪に行ってるんですが、今日は仕事で大阪を離れています。奈良か和歌山へ行く予定だと言っておりました。ですから、見送りだなんてあり得ないんです。どういうつもりなのか分かりませんが、作り話をしたんです」

寂しさのあまり、迷子になった江里香は父親に会った夢を見たのだろう。それを警官には言えなかった。

「なるほど。子供はときどき、突拍子もないことを言いますからね。——ということは、お嬢さんは東京駅に来て、迷子になったと考えてよろしい訳ですね」

「そうだと思います」

「分かりました。ではそのように処理させていただきますので……」

警官の乗った車が発進し、その姿が見えなくなるまで麻里子は頭を下げ続けた。

虚しさだけが麻里子の心を占めていた。江里香の言葉を信じてあげたかったが、信じるにはあまりにも荒唐無稽な話だった。

重い気持ちで玄関の前に立つ。麻里子は無理に笑顔を作った。中では江里香のお誕生日会が開かれているはずだ、暗い顔をしてはいられない。

玄関の扉を開ける。

江里香と早紀ちゃんのはしゃぐ声が聞こえるはずだった。お誕生日会を賑やかにやっているものだと思っていた。しかし、家の中はひっそりとしていた。麻里子はすぐに、その理由に思い至った。たった今警官から聞いた話を、江里香も早紀ちゃんたちにしたのだろう。対応に苦慮する早紀ちゃんと谷本先生が思い浮かぶ。

リビングに行くと、予想どおり、早紀ちゃんと谷本先生の困惑した顔があった。

「いま、内山さんから聞いたんですけど……」と、谷本先生が話を始めた。

「内山さん……大阪から新幹線で帰ってきたらしいんです」

「私もたった今同じことを警察の方に聞きました」

麻里子は微笑みを浮かべ、江里香と向き合った。

「東京と大阪がどれくらい離れているか、分かる？」

「だいたい分かる」と言い、江里香が拗ねた表情を見せる。

「新幹線に乗っても二時間半くらい掛かるの。江里香がいなくなって二時間ちょっと、ここから東京駅まで四十分くらい、だから大阪から戻ってくるどころか、行くだけの時間もないのよ」

「でも、本当だもん」と、江里香が口を尖らせる。

「どうやって行ったのかは分からないけど、帰りは新幹線に乗っていたもん」

「行けるわけがないでしょう、お金だって持っていなかったんだから」

麻里子はちょっと大袈裟に、当惑している自分を演じた。自分がいかに江里香を心配しているか分かって欲しかった。しかし、それは江里香に通じなかった。江里香は表情を変えた。生き生きとした目になっている。これから話すことが嬉しくて堪らないようだ。

「それがねえ、本当に不思議だったの。公園の角を走って曲がったら、見たこともない道に出たの。おうちへの道じゃなくて違う道。間違えたはずはないんだけど、周りを見渡しても見覚えがないから引き返したの、変だなんて思いながら……ほんの五十メートルくらい。でも、そこに公園はなかった。あったはずの公園がなくなっていて、知らない道が続いていた。段々怖くなってきて、知ってる道に出ますようにって祈って歩いたの。でも、歩いて歩いて知ってる道には出なかった。そのうち人が多くなって、駅の方に歩いてたんだと思ったの。だけど駅じゃなかった。行ったこともない場所だった。新宿か渋谷か、そんな感じがしたの。それくらい人が多くて、どうしてこんなところに来ちゃったんだろうって、不思議だった。どういう訳か、周りにいる人がみんな関西弁で話していたの。変だなんて思いながら歩いていると橋に出て、テレビで観たことのあるでっかい看板が見えたの。グリコの看板。私は大阪にいたの」

「そんなのある訳ないじゃん」と、早紀ちゃんが口を挟む。

谷本先生がそれを微笑みでたしなめた。

「話を続けて」

江里香が笑顔で頷く。

「私は大阪にいる——それが分かって、心細くなって泣いちゃったら、周りにいた人が迷子だって騒ぎ出して……恥ずかしかったけど、どうしようもないから私は親切なおばさんに連れられて近くの交番に行ったの。お巡りさんに何処から来たのって訊かれたから、東京って答えたら変な顔をされた。お父さんかお母さんは一緒じゃないのって訊かれて、ひとりで来たって答えたらますます変な顔をされた。それから名前と住所、電話番号を訊かれて、お巡りさんがおうちに電話しようとしたときにパパが来てくれたの」

「いい加減にしなさい、そんな話……」

今度は麻里子が口を挟んだ。

江里香の話が終わらせたかった。谷本先生たちに江里香の妄想、夢の話をつつまでも聞かせるのは申し訳なかった。移動手段が分からずに大阪へ行ったと言うことでさえ荒唐無稽な話なのに、大阪にいるはずのない父親に会ったという。誰がどう聞いてもあり得ない話で、これ以上、江里香の嘘の話にふたりを付き合わせると、ふたりが江里香から離れてしまうのではないかと恐れた。

「最後まで聞いてみませんか」と、麻里子を制して谷本先生が言う。谷本先生の顔から困惑の表情は消えていた。むしろ江里香の話に興味を持っているようだった。

「先生がそう仰るのでしたら……」

母親の許可があり、江里香は話を続けた。

「交番にパパが入ってきて、捜したんだぞって言ったの。嬉しくてパパに泣きながら抱きついちゃった。お巡りさんにお礼を言って外に出たら、お誕生日会に行けないからその穴埋めにパパが大阪を案内してくれることになったの。喫茶店でパフェを食べて吉本の劇場へ行って、それから大阪城へ行って……吉本は面白かったし、お城に行ったのも初めてだったから楽しかった。あっという間だった。どうして楽しい時間はあっという間に終わってしまうんだらう。パパとの時間がもうすぐ終わると思うと、新大阪の駅に行くのが嫌だった。悲しくて泣いちゃった。もっと大阪にいたかった。ママには悪いけど東京には帰りたくなかった。だけどそういう訳にはいかないから、新幹線に乗ったの。パパがお見送りにホームまで来てくれて、そして言ってくれたの、一緒にはいられないけど、いつでも江里香のことを思っているからって。嬉しくて、寂しかったことなんかいっぺんに吹き飛ばしちゃって、笑顔で泣いちゃった」

江里香が涙を零した。照れた笑顔を見せる。

「そしてね……」と、涙を手で拭いながら話を続けた。

「新幹線に乗って東京に帰ってきたの。途中で寝ちゃったから、いつ着いたのかさっぱり分からなくて、駅員さんに起こされちゃった。でも、そこは新幹線じゃなかったの。駅のベンチだった。いつの間にか新幹線を降りてベンチに座っていたの」

「それから駅のお巡りさんが来てくれたのね？」と、谷本先生が優しく問い掛ける。

「うん。お巡りさんは優しくかったけど、私の話を信じてくれなかった。夢を見てたんだらうって」

「私もそう思うな、江里香ちゃんは夢を見ていたんだよ」と、早紀ちゃんが言う。

麻里子もそう思っている。

江里香は父親に会いたくなって東京駅へ行ったのだろう。行ったはいいが、新幹線に乗るお金は持っていない。どうしたらいいか分からなくなり、途方に暮れて駅のベンチに座った、そして眠り込んで夢を見た――。

テレビなどで観て、グリコの看板や大阪城などが記憶にあったのだろう。父親と愉しく大阪の街を散策する夢――父親を思う娘の感動的な話ではあったが、所詮、虚言に過ぎない。麻里子は江里香が不憫でならなかった。江里香は心の迷子になっている。そこから助け出すのは自分の役目。それは分かっている。しかしその方法が分からない。

「でも、本当よ。本当のことだもん」と、江里香が再び口を尖らせた。

「それじゃどうやって新幹線を降りたの？ 改札を通ったはずでしょ、切符は？」

早紀ちゃんが訊くと、江里香は困惑の顔をした。

「それは……」と、言い淀む。

「夢を見ていたかなんてどうでもいいじゃない。こうして内山さんが無事に帰ってきたんだから」

谷本先生が江里香に微笑みを向ける。

「内山さんは本当にお父さんが好きなのね」

江里香がこっくりと頷く。

「どうしても会いたかったんだよね？」

谷本先生が優しく念を押して訊く。

「寂しかったから会いたかったの。でも、もういいんだ。もう大丈夫。寂しくなんかない。だって、パパはいつでも江里香のことを思ってくれてるって分かったから」と、嬉しそうに江里香は言った。

「そうよ。内山さんのお父さんはいつだって内山さんのことを考えてくれているのよ。いつだって内山さんの味方よ」

江里香を鼓吹する谷本先生は以前にも増して美しかった。妬みも嫉みもなく、麻里子は谷本先生がただ羨ましかった。

時間が遅くなってしまったので、今日のお誕生日会は中止になった。谷本先生にも来てもらいたくて今度の日曜日に持ち越すことにした。麻里子は早紀ちゃんと谷本先生を玄関から送り出した。

リビングに戻ると、江里香が眠たそうにしていた。いろんなことがあって疲れているのだろう。

「お風呂に入ったら」

「うん」

江里香が風呂場へ行く。

麻里子の脳裏から、谷本先生が言った、内山さんの味方という言葉が離れなかった。

もちろん自分も江里香の味方だ。ずっとそうだったし、これからもそれは変わらない。ただ——江里香の妄言にどう対処すればいいのか、それが分からなかった。些細な嘘や作り話なら笑い飛ばしたり、聞かなかった振りも出来るだろう、しかし、今回のように警察まで巻き込んだの妄言に対して、自分のなすべき方策が見つからない。叱りつけるのか、それとも信じた振りをするのか。否定するのは簡単だが、それをやってはいけない気がする。

とはいえ、とても信じられる話ではない。江里香は、公園の角を曲がると知らないところにいたと言った。そこは大阪だった——あり得ない話だ。江里香は夢と現実を混同している。夢の世界へ逃避している——。

江里香がお風呂から上がってきた。上気した顔ではにかんでいる。

「今日ごめんね。いっぱい心配掛けちゃった」

江里香が素直に謝った。態度も神妙で、麻里子は江里香の変化を感じ取った。

「いいのよ。疲れただろうから、今日はもう寝なさい」

「うん」と言って、江里香はリビングを二、三步踏み出し、振り返った。

「もう大丈夫だから。いい子でいる。もう嘘は吐かないから」

麻里子が頷くと、おやすみなさいと言い、江里香は自分の部屋に向かった。

夢の中の出来事とはいえ、父親らしく振る舞ってくれた貴志の態度がよほど嬉しかったのだろう。これまでの嘘を反省しているようだし、近所をお騒がせしてしまったが、何はともあれ、これでよかったんだと思った。自分では何もしてあげられず、江里香が大阪に留まろうとしたことに多少の疎外感を持ったものの、麻里子は嬉しかった。これで以前の、素直な江里香が戻ってくるはずだ——。

明日は学校の先生方や捜索を手伝ってくれた近所の方々にお礼を言いに行く。東京駅の鉄道警察にも挨拶に伺わねば――。

今日の出来事を夫の貴志に報告するのはよそうと思った。大騒ぎにはなったが、結局ただの迷子に過ぎない。事件性がない以上、余計な心配を掛けたくなかった。江里香が、夢に見た話を現実に起こったかのように話したことも、夫の耳には入れないでおこいた方がよさそうだった。

廊下の電話が鳴った。

貴志からだった。ちょうど貴志のことを考えていただけに、麻里子は少し驚いた。

「江里香はまだ起きてる？」

「ううん。疲れちゃったみたいで、さっき寝たところ」

「そうか。ひと言、お誕生日おめでどうって言おうと思ったんだけど遅くなっちゃったな、明日の朝にするか」

「忙しいみたいね。やっぱり和歌山の方まで行ってきたの？」

「うん。朝一で行って、催事の準備をして、取引先を回って、ちょっと吞んで……たった今帰ってきたところだよ。お誕生日会はどうだった？ 盛り上がった？」

「まあね」

「江里香が、お誕生日会に帰ってきてくれて言ってたから心配だったんだ、何かわがママを言い出すんじゃないかって」

「大丈夫よ、江里香は大丈夫」

「そうか。少しはママの苦勞が分かったのかな」

「苦勞だなんて……」

おろおろしてただけで、不甲斐ない母親だった。江里香には何もしてあげられていない。電話に間が出来た。

次に発した貴志の声音が変わった。

「実は……変に思うかもしれないけど、夢の中で江里香が言ったんだ、ママに迷惑を掛けているから謝りたいって」

「夢？ 夢を見たの？」

「夢くらい見るよ。変な夢だった。和歌山から戻ってくる電車の中だった」

変な夢——麻里子は無性に貴志の夢の内容が知りたくなった。

「どんな夢だったの？」

「どんな夢って……変な夢としか言いようがないよ。たいがい夢ってものは訳の分からないものだけだね。それにしても、たかが夢の話をやけに聞きたがるね」

「いいから教えて」

「そんなに言うんなら話すけど……僕はどういう訳か道頓堀を歩いていて、道行く人を眺めていたんだ。夢の話だから、どうして道頓堀にいたのかなんて訊かないでくれよ。そしたら遠くに迷子の女の子がいたんだ。江里香に似ているなと思っていたら見失っちゃって。こんなところにいる訳がないと思いつつも、あんまり似ていたから気になって捜したんだ。歩いていたら交番があって、中を覗いて僕は驚いたよ、迷子はやっぱり江里香だったんだ。そんな都合のいい偶然なんて夢でなければあり得ないね。江里香が謝りたいって言ったのは交番を出てすぐだよ、神妙な顔をしてね。それから大阪を観光案内したんだ」

「吉本の劇場や大阪城でしょ？」

「うん、そうだけど……どうしてそれを？」

「パフェも食べたんでしょ？」

「どうして知ってるんだ？ 僕の夢の話だぞ」

「不思議ね。あなただけの夢じゃなかったのよ。江里香も同じ夢を見ていたの」

麻里子は確信していた。あり得ないような話だが、ふたりは奇跡的に同じ夢を見ていた。同じ夢を共有していた。同じ夢の中に存在していた。

「同じ夢を見た？ そんなことがあるはずないだろう」

「そうとしか考えられないわ。それじゃそのあとどうなったか当ててみましょうか？」

「ああ」

「新大阪の駅から江里香は新幹線に乗ったんでしょ？ それをあなたはホームで見送った、違う？」

「合ってる……不思議だ、そんなことって……」

貴志の動揺する声が電話口に広がる。

「私にも信じられないけど、でも実際にふたりは同じ夢を見たのよ。話さない方がいいかなって思ってたんだけど、やっぱり話すわ」

「何だよ、急に」

「江里香はその夢を東京駅で見たの」

「東京駅？ どうしてそんなところに」

「あなたに会いに大阪へ行こうとしたんだと思うの。でも新幹線には乗れず、迷子になって駅のベンチで眠ったようなの。そのときに夢を見たらしいの、あなたが見た夢と同じ夢を」

「夢の中だけじゃなくて、現実でも江里香は迷子になっていたのか……。それで、何ともなかったのか？ 怪我とかしてなかったのか？」

「大丈夫よ」

「よかった。——お誕生日会は？ そんなことがあって本当にお誕生日会をやったの？」

「ごめんなさい。今日は出来なかったわ。日曜日に延期することにしたの」

「そうか。でも、パパがいないんじゃない寂しいだろうから、再来週にでもやり直さないか」

「帰ってこられるの？」

「休日出勤が続いたからね。上手く都合をつけられれば、まとめて休みが取れるかもしれない」

「そんなに無理しなくてもいいみたいよ」と、麻里子は笑みを零して言った。

「どうして？」と、貴志が不審の声で訊く。

心外なようだ。自分の存在が薄くなったとでも思っているのだろうか。麻里子は可笑しかった。

「江里香はあなたの気持ちを知っているからよ」

「僕の気持ち？ よく分からないな」

「新幹線のホームで江里香を見送る際、言った言葉があるでしょ、それを聞いて江里香はすごく嬉しかったみたい。——一緒にはいられないけど、いつでも江里香のことを思っているから——外国人みたいね」と、麻里子は茶化して言った。

「あれか……。改めて言われると恥ずかしいな。夢だったからね、夢だと分かっていたから言えたんだ。現実には江里香を前にしたら恥ずかしくて言えなかっただろうな。——それにしても不思議だ。夢の中で話した言葉がちゃんと相手に通じているなんて、何だか本当に江里香に会っていたような気がしてきたよ」

「本当に会っていたのかもよ。父と娘が夢の中で語り合うなんていい話じゃない」
少しいじけたようにして麻里子が話すと、貴志は笑い声を漏らした。

「僻んでいるのか？」

「そんなんじゃないわよ。ただちょっとね……」

父と娘は同じ夢を共有したというのに——。やはり疎外感は否めない。

「まあ、麻里子の気持ちも分かるけど、麻里子は江里香にとって、いて当たり前存在なんだよ。よく言うだろう、空気みたいな存在って」

「何だか有難味がないわね」

「そんなことはないよ。当たり前の存在の有難さに気づいたから、江里香はママに謝りたいって言い出したんだよ。いい子じゃないか、ちょっぴり反抗的だけど。素直で明るい子だ。もう大丈夫だと思うよ」

「本人もそう言った、もう大丈夫だって。もう嘘は吐かないって約束してくれたわ」

「そうか。本人がそう言うんなら大丈夫だろう。それじゃ明日の朝、また電話するよ」

電話を切った麻里子は満ち足りていた。

浴槽に浸って四肢を伸ばし、幸せを噛みしめる。

翌朝、江里香が学校へ行く前に貴志から電話があり、麻里子はすぐに江里香に代わった。嬉しそうな江里香の笑顔——一日遅れの、お誕生日おめでとう、を聞いているのだろう。

電話を置いた江里香が慌てて玄関を飛び出した。朝の忙しい時間に父親と思わず話し込んでしまい、遅刻しそうになっていた。

家事が一段落したところで学校へ行き、先生方にお礼を言う。その戻り、お世話になった近所の家を訪ねる。そして麻里子は東京駅へ向かった。

四十分で東京駅に着く。

鉄道警察の詰め所には昨日の若い警官もいた。制服を着ていて凛々しく見える。麻里子がお辞儀をすると、向こうも思い出したように頭を下げた。

「夕べは遠いところまで娘を送ってくださりましてありがとうございました」と、微笑んで言う。

「いいえ、昨日も申しましたとおり職務ですから。ちょうどよかった、ちょっと聞いて欲しいことがあるんですが……」

そう言ってその警官は日誌のようなものを机の上に広げた。

まだ何か――。

麻里子から微笑みが消えた。

「お嬢さんの件は我々も、たんに東京駅での迷子と、そう思っていたんですが」

「違うんですか？」

麻里子の中に暗雲が広がる。

「迷子にはなっていたんでしょうが……実際に大阪に行っていたのかもしれませんが。お嬢さんは大阪の交番で保護されたと言っていました。そこへお父さんが迎えに来てくれたと。あり得ない話なので聞き流していたんですが、やけにリアルな話だったので念のために確認を取って見たんです。グリコの看板だとか、聞いた話の内容からおそらく道頓堀の交番だろうと推察しまして……。するとですね、昨日、確かに内山江里香という女の子が迷子になって、連れてこられていたんです」

若い警官が日誌を見ながら首を捻る。

「同姓同名では？」

それほど多い名前だとは思えない、確率が低いのは分かっていたが、麻里子はあえて口にした。江里香のはずがない。

「住所も電話番号も合っていました。本人に間違いありません」

「そんな……そんなはずがありません。江里香がいなくなったのは二時間とちょっとなんです。その間にどうやったら大阪を往復できるというんですか？」

「そこが我々にも分かりません。お嬢さんの失踪した時間がもっと早かったということはありませんか？ 二、三時間くらい前に……」

「それはあり得ません。二、三時間前にいなくなっていたとしたら江里香はまだ学校にいた時間ですよ。第一、本人はお金を持っていなかったんです。どうやって大阪まで行くんですか？」

「そうですか……。それじゃ無理ですね。道頓堀の交番にいたのは事実のようですから、何とか辻褄が合わないかと思ったんですが……。となると、交番に現れた内山江里香という女の子は誰なんでしょう？」

不思議そうな顔で若い警官が訊く。

「私に訊かれましても。ちなみに、交番で保護された女の子はどんな服装をしていたんですか？」

「赤いTシャツにデニムのスカートです」

「同じですね」

「タベのお嬢さんの服装と同じです。どう考えてもどう一人物だと思われるのですが……」

「そう考えざるを得ませんね」

どうということなんだろう。麻里子は頭が混乱するばかりだった。

時間的にも経済的にも、江里香が大阪へ行けるはずはなかった。だが、内山江里香なる女の子が交番で保護されている。当日の江里香と同じ服装の女の子——住所も電話番号も合っている。その状況は江里香が話してくれた内容と全く同じだった。夫の貴志が話してくれた内容とも合っている。現実には起こった話として、江里香は大阪に行って父親の貴志に会ったと言っている。貴志と大阪城や吉本の劇場へ行ったと言っている。貴志も江里香を道頓堀の交番で引き取ったと言っている。そのまま江里香を連れて大阪の街を観光したと言っている。ただし、貴志は夢の中で——。貴志が夢を見たのは和歌山から大阪に戻る電車の中だった。

東京駅からの帰り、電車の車窓から夕日が見えた。夕映えがビルを照らし、赤く染めている。江里香は本当に大阪へ行ったのだろう。

とても信じられない話、あり得ない話だったが、麻里子は信じてみようと思った。谷本先生のように美しくなりたいと思った。こんな駄目な母親が江里香にしてあげられることといえば、何処までも、とことん信じることくらいだ。江里香の話を母親である自分が信じないでどうする！

世の中には説明のつかない不思議な現象があると聞く。今回の江里香に起こった出来事も、そういった不思議な現象の一つなのだろう。信じていれば貴志のように、奇跡的に江里香と同じ夢を共有できるかもしれない。貴志とも夢を共有できるかもしれない。三人が夢を共有できるかもしれない。たとえ夢の中であったとしても、遠く離れた家族が一つになれるなんて、こんな素敵なことはない。

西の空に夕日が沈んでいく。

麻里子は今日の晩ご飯をビーフカレーに決めた。

了